年数重ね 不具合頻発

復興 道半ば 3 「仮設」のストレス

震災5年 岩手・大槌からの報告

非常事態だし、ぜいたく言わない。ただ…

玄関を開けるとすぐに台所。三つの居室の出入り口はアコーディオンカーテンだ。最も広い6畳間はテレビ、こたつ、食器棚でほぼ埋まっている。天井が低いのか、圧迫感を覚える。

「まるで箱の中に閉じ込められているような気分になる。家族間のプライバシーなんて全くありません」

国際医療ボランティアAMDA（岡山市）のメンバー菅谷安美さん(25)はため息をつく。岩手県大槌町に開設された支援拠点「大槌健康サポートセンター」のスタッフの一人。東日本大震災の津波で家を流され、仮設住宅で両親、祖母と4人で暮らす。

仮設住宅はプレハブだ。夏は暑くて冬は寒い。防音も不十分で「お風呂でシャンプーのボトルを倒した音でさえ、近所迷惑が心配」と菅谷さん。

「部屋の中にいるだけでストレスを感じる。いらいらが募って普通の会話ですらけんか腰みたいになる」。家族は皆、1人になりたい時は車の中にこもるという。

◇

災害で家を失った人を緊急避難的に保護する仮設住宅。原則2年間だった入居期間は5年間に延長されたが、津波で壊滅的な打撃を受けた大槌町では自宅再建に向けた土地区画整理事業などが遅れ、転居先が十分に確保できていない。今も町人口1万2千人余の2割以上が仮設暮らしだ。

「非常事態だし、ぜいたくを言うつもりはない。ただ、年数がたつとね、仮設はどうしてもいろいろと不具合が出てくる」

103戸の仮設住宅が集まる「小鎚中村仮設団地」代表の赤﨑幾哉さん(74)は訴える。雨漏りしたり、床がゆがんでサッシが外れ、鍵がかからなくなったりする。震災から3年たったころから、赤﨑さんの元へは入居者からの苦情が相次ぐようになった。

自分も部屋の湿気に悩まされている。この時季は毎朝、結露を拭く。それでも窓の周りや天井には、気づけばカビが生えている。

「行政は市街地の再建や防潮堤の整備を急いでいるが、私たちにとっては家を取り戻すことこそが復興。そこを一刻も早く、との思いが強い」

住宅再建をめぐっては、近年の資材高騰が被災者の肩に重くのしかかる。「町内では5年前に比べ、住宅建設費は1・5倍近くになった」（ある仮設住宅団地の自治会長）。年金暮らしの高齢者の場合、特に深刻な問題という。

◇

「避難所で一晩過ごし、様子を見に戻ったら家がなかった。財布も通帳も何もかも津波に流された」

町内の仮設住宅で暮らす古沢マサさん(72)が振り返る。震災2年後に夫を亡くし、長男と長女は町外に出た。今は独居だ。

仮設住宅を出たら元の場所に家を建てたい。ただ、資材は高騰している。住宅建設に貯金をはたけば、生活費に不安が残る。家を継ぐ長男が将来帰ってくるかどうかも分からない。

「私が死ぬまで暮らせる場所だけを考えればいいのかもね」。自力での再建が難しい人を対象とする災害公営住宅への入居も、古沢さんは申し込んでいる。

こたつやテレビでスペースがほぼ埋まってしまう仮設住宅の居室。住民は強いストレスを抱えている＝2月6日

震災から5年たってもなお、大槌町では人口の2割以上が仮設住宅で暮らしている＝2月7日

ズーム

仮設住宅　自宅をなくした被災者のため、災害救助法に基づき行政が提供する住宅。プレハブが基本。大槌町では48団地2100戸が整備され、2月現在、1551戸に3031人が入居する。間取りは1人用の1DK、2、3人用の2DK、4人以上用の3DKがある。他に、既存の民間賃貸住宅を自治体が借り上げる「みなし仮設」もある。